The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	(海外短信)
Author(s)	党, 晟; 平田, 自一
Citation	デザイン理論. 1983, 22, p. 106-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（海外報告）

海外会員　党　　晟

この二三年間，中国では現代化実現のための新しい経済政策の遂行につながって，デザインに対する関心も益々高まる一方です。ここで，このことについて，ほんのわずかな例をあげるのにすぎないのですが、報告させていただきたいと思います。

まず，多くのデザイン学会が結成され，これらの学会の企画によって，大規模な展覧会がしばしば開催されることはこの新しい気運をもっとも端的に示しているのです。例えば，去年の末頃西安で開かれた「全国包装・広告展覧会」は，パッケージデザイン，ポスター，テレビコマーシャル，商店の外装など，それぞれのジャンルの作品およそ千点以上を一堂に集めたかつてなかった盛大なる企てだけでなく，テレビのようなマスメディアの利用，新聞・雑誌広告のようなこの二・三十年間中国で姿の消えたものの再登場など注目すべき点があって，中国のデザインの新しい出発点を象徴する出来事ではないかという印象を人々に与えたほどです。商業デザインばかりでなく，プロダクトデザインやインテリアや服飾デザインなどの面でも活発な動きを見せます。とくに，服飾デザインに関しては，「ブルジョア生活様式の宣揚」と見なされる恐れがあったので，十年ぐらい前だったら，中国ではおそらくだれでもその領域に足をふみいれることを憚たでしょう。しかし，近頃のニュースによりますと，上海などの大都市ではファッションショーさえも催されたそうで，一時の話題となったことです。

デザインについての研究もある程度進められています。デザイン・工芸関係の雑誌といえば，六十年代にただ「装飾」という一種類しかなかったような

状況に対して，今発行されているデザイン専門誌は「実用美術」，「装飾」，「中国包装」，「時装」，「家具と生活」など，私の聞いたところによれば，十種類もあるそうです。これらの雑誌の大部分はまだ資料的なものにすぎないのですが，アール・ヌーボーのポスターから今日のシステムキッチンまで，外国のデザインの作例も数多く掲載されたのは非常に興味深いことだと思います。もとは建築とデザインの領域においても，「思想性」と「民族伝統」をあまりにも強調しすぎだったので，中国では長い間近代デザインの理念とその成果を無視されたのは事実ですが，近年になって，その研究も徐々におこなわれるようになりました。またモダンアートとモダンデザインを区分して対処する傾向が一般にみられる。つまり，「抽象芸術」に対して激しい批判をつづける研究者も現代芸術家が「実用工芸美術」（デザインのこと）と建築に大きな貢献をとげたということを認め，中国の現代化のためにその成果をとりいれようと主張しているのです。

当然，中国はまだ工業発展途上の国ですから，一般の研究者のデザインに対する理解は依然として応用美術の範囲を越えていないし，実際の需要から外国の経験を学びとろうとしても，近代合理主義の造形を単に一時的な流行，あるいは芸術家の感興から生じた「美術様式」とみなされてしまう傾向が強く，手工業段階から近代工業へ転換する時にでてきた美学上の問題はまだ明確な意識をもって解決しょうという努力もみられません。しかし，中国では「千里の旅も一歩から始まる」とよくいわれるように，その解決はいかに時間を費やすとしても，今日の著しい発展をみれば，期待し得ることだと信じます。

（海外短信）

南京芸術学院訪問

平田自一

1983年9月28日より10月14日まで中国を旅行する機会を得た。目的のひとつに現代の中国のデザイン状況の視察があった。これが南京芸術学院の訪問によって，そのデザイン教育の一端を瞥見し得ることになった。

南京芸術学院は上海美術専科学校・蘇州美術専科学校・山東大学芸術系の三者が合併し1952年に成立したものである。内容は美術系（中国画・油画・版画），工芸美術系（装潢美術設計・染織美術設計・工芸絵画・織繍工芸・工芸彫刻）に分れる。また音楽系があってここでは音声・民族器楽・管弦楽・鋼琴・音楽創作の各専攻がある。学部四年制に加えて大学院二年制があり，二年以内の研修生制度がある。現在の教職員数470名。学生数379名であるという。敷地内に建っている教場棟はかなり多いように見受けられたが，そのわりに学生数の少いのは意外であった。入試の競争率は百倍に近いというから，学生は選り抜きのエリートであろう。入試実技科目は写生・平面構成と自由制作の三本立て。自由制作は全く自由で平面立体を問はないという。

さて目的とするデザインの専攻は，工芸美術系の中の装潢美術設計がこれに当る。装潢という聞き慣れない名称はそもそも表具の意味で，漢英辞典にも to dye to mount scrolls などと出ているが，これが内容的に発展して日本でいうデザインの意味を持ちだしたものらしい。これからも想像されるように，どちらかといえば平面的なグラフィックを主体とする科業が主体となるようで，事実デザイン専攻は平面と立体に分れるものの，学生は平面に進むものが多く，立体は少いとのことであった。立体は工業デザインのことであるが，家電の機器や車輌のデザインはほとんど見当らなかった。ただパッ

ケージデザインは，段ボール函から各種商品の化粧函類が多く，むしろ現在の時点においてはこれらが立体デザインと呼び得られる分野の仕事ではないかと想像される。緑色ガラスのビールびんに各種のラベルを貼ったものも見受けられた。しかしびんそのもののデザインは行わず，もっぱらラベルをデザインしたものであるという。室内装備に関するインテリアの専攻は未だない。教員や学生の作品で実用化可能のものは即実現されるということを別の時に聞いたことがあるが，パッケージのデザインで印刷されたゲラ刷りが見当ったのはすなわちその証據ともいえるようである。これらの作品はすべて学校の作品展示室に額入りで陳列されているから，学生の水準を知るのには極めて便利である。同時に教員の作品，院生の作品も別室に陳列されており，時にはそれに値札までついていた。展示室の一隅でわれわれデザイン関係の者と一問一答して下さったのは同学院美術研究所の黄午生先生である。黄先生はこの10月４日に正式オープンした中国隨一の超高層ホテル「金陵飯店」の36階，回転展望室の曲面壁画を制作した人でまだ30台であろう。たまたまわれわれはこのホテル初めての日本人賓客として宿泊する光栄に浴した。同時にこの壁画を目近にすることとなったが，中間調の色調を用いて七夕の故事などを華麗に構成してある。質疑の時間あまりにも短かく後半はほとんど京都市立芸大デザイン科の説明に取られた。中国の人々にとって現代日本のデザイン事情は非常に興味あるものであったようである。その中での相互の共通点などは言外の意あい通ずるという趣きがあり今後の交流が望まれる。中国の近代化にはデザインの分野がとりわけ必要であろう。街頭で見かける各種の広告看板，百貨店内の各種商品群，また日常使用されている民衆の日用雑器類，これらの中には現代日本のデザインの原点的なものが散見される。中国が日本のデザインをひとつの指標としているとするならば，われわれもまた現代デザインの反省として中国の現状をしっかり見つめる必要があろう。